

愛知 奇聞 明治 元一 坊



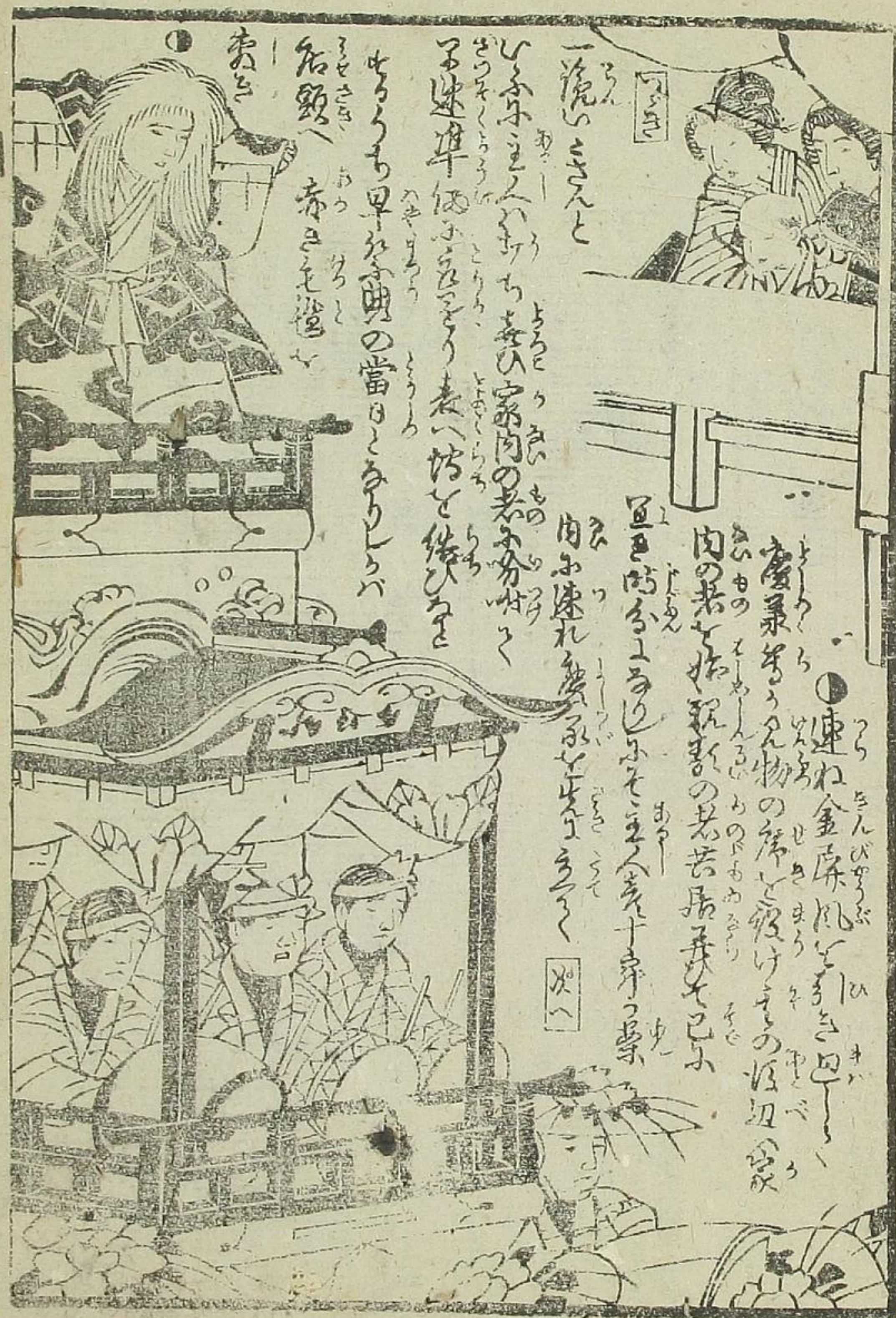
梅堂

國政筆

前篇 松延堂 梓



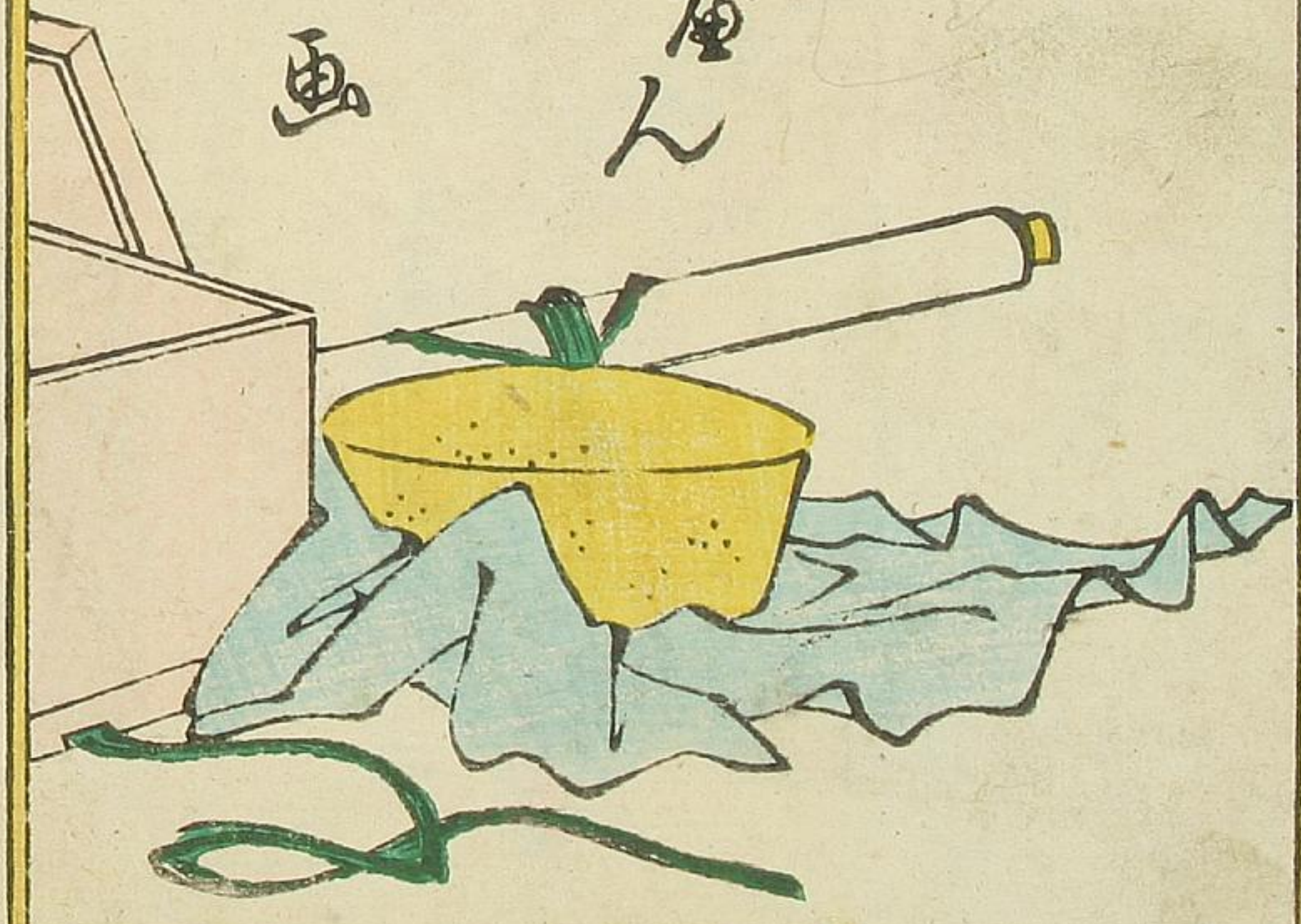
A 587
2



一流いさえと
 いふ身まゝいふちよりの家内の若ふ分り
 子速舟はなをさるる表へ坊と修ひをさ
 せらるち早れ天明の當りとなりしうい
 名頭へ 赤き毛氈
 赤と

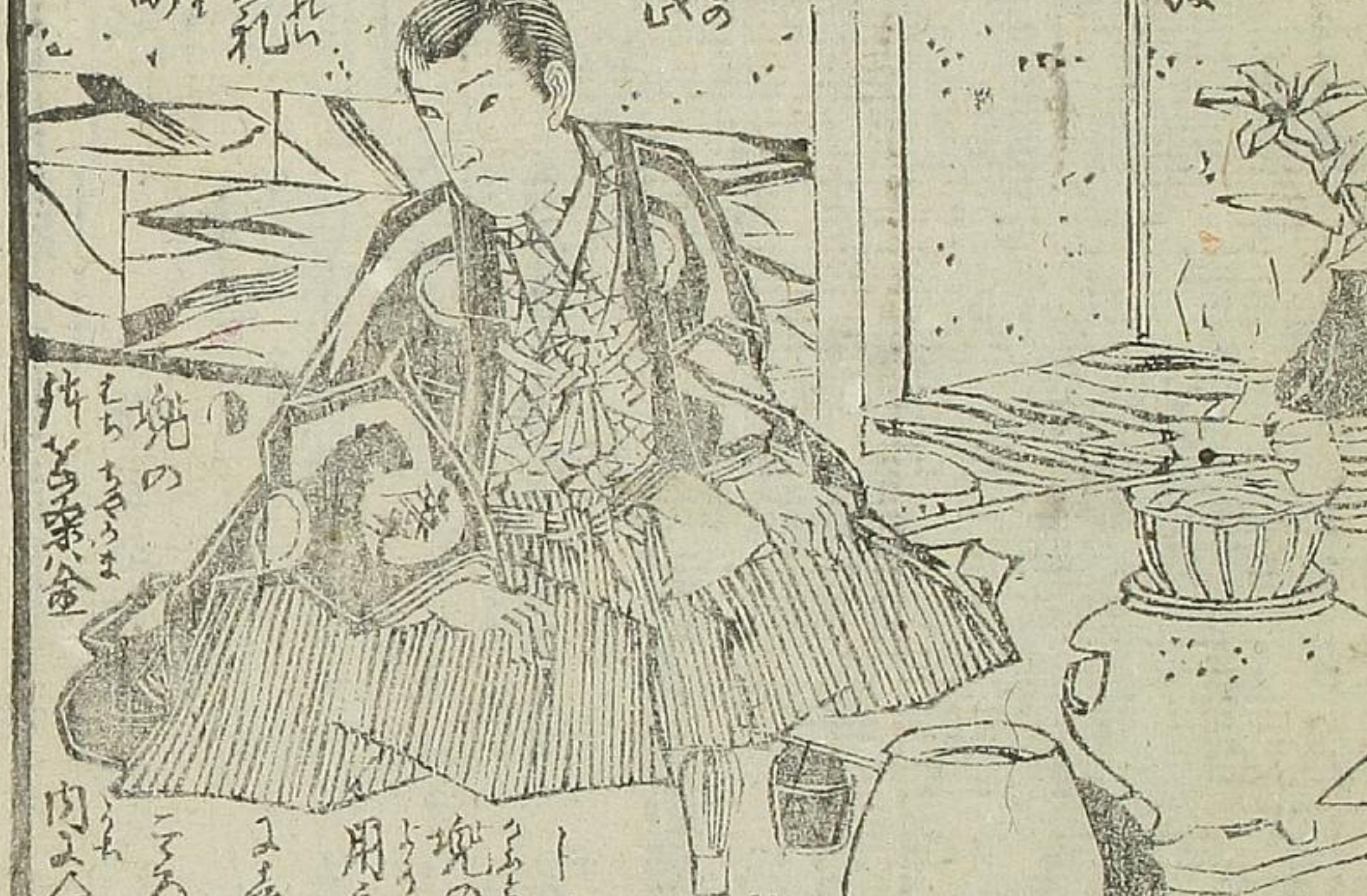
●連れ金原丸を引さし
 慶長寺うん物の席と被けその垣辺
 肉の若と垢取歌の若若居其七已よ
 直に坊分よりしふそまへ十身つ景
 肉ふ速れを慶長とせよまろく
 水へ

明治
 天一坊
 文京
 国政画
 新
 庵人



48-8482

村瀬源次郎
 鐘を敲けの席へ遠きぬ
 柳の尻かき名古といへり
 東家一の松の華よて
 新と庭を大層高樓
 東家より上の方へ旅行
 是の人へ何れも由緒載せて
 此小豆を傳へ平乃
 解ふ此のふ東家
 東思神
 長を馬のしるし
 是を手に持て
 此の長を馬のしるし
 是を手に持て



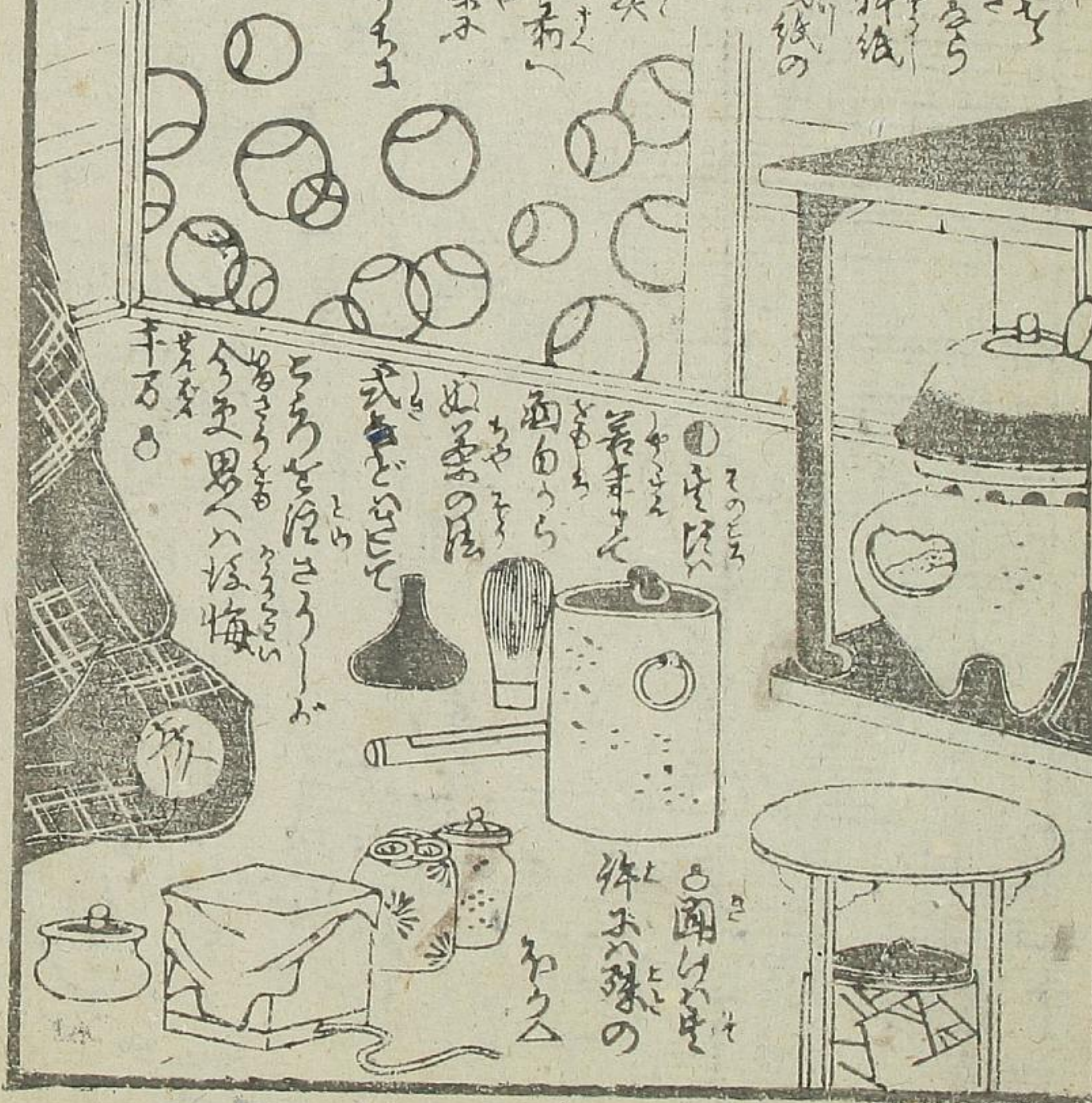
此の長を馬のしるし
 是を手に持て
 此の長を馬のしるし
 是を手に持て
 此の長を馬のしるし
 是を手に持て

鐘とて引も切らぬ波
 と赤つ解集の有様
 大なるさるるを紙
 能歌子見物に居る
 小お菊ひ、カ
 主人女子供の
 如くお礼をの
 つん物さるとも
 じさる其のわ
 ことと備嘗て
 徳川家の記憶を
 家康公の太極内陣のわり時



徳川家の記憶を
 家康公の太極内陣のわり時

阿走下女子焼飯を
 捲らさるるを源頼朝方より
 さじその向ふ屋敷に料理
 双をより書きたる書箋の
 末切(東宮宮)と
 等々不吉書き徳也の奥
 深き所(貼)らせかて中(有)
 押一並して焼折の抹茶
 奥より所免角をさるる
 山東由通り名れゆ
 多く漏れ其(日)より
 何(分)西(白)をさるる
 楽一先と色(工)也



疑せ(元)末(人)者(十)角(ハ)
 千(石)利(休)を(流)れ(せ)飯(じ)西
 茶(葉)の(入)内(家)完(て)る
 共(の)門(人)を(茶)葉(茶)深(く)心
 せ(ま)る(と)古(代)の(茶)葉(も)多(く)

茶(葉)を(ま)さ(せ)て(湯)に(ゆ)せ
 茶(葉)を(ま)さ(せ)て(湯)に(ゆ)せ
 我(由)使(川)家(盛)人(の)以(ハ)
 故(中)よ(て)茶(葉)を(ま)さ(せ)て
 小(茶)の(湯)の(茶)葉(も)老(れ)ゆ







四五ヶ一甲
 雙ふは如きの
 前作
 揮毫を
 ぬいごま存せんと
 之ひらきへ度承の矢依るく
 承知し書画の杜若がほよそて筆硯由
 ち小用兼一居きバ何時よても惚ららるるん

或日先十希のる
 かう好まを流の
 此情を

べし事由なげま各へけきハま十弁ハ
 極く喜こびる速を流るる絹地を
 思ひよのへて慶承の前へ持ちたれ
 一子慶承の情なる色むく何やん
 さうくと書き流し款冒よ「徳川の
 二字為款ハ「松平慶承「源孫」の二顆を
 捺して流しけきハ主人ハ流く喜びて流るハ
 柳堂の流札を流るるまうくくけありて筆
 勢といひ印教といひ天珠勇とてやと感賞
 せりそのもちまうま承承ハ色人せと「家完
 ら
 筆ととも小酒窩を催して身中酬み及び
 一紙草匣の中より例の筆硯をとりのけ
 秋書紙ハ一筆書の「五士を画き家完よ因



凶發せと有り
 けきハ家完ハと
 あえま「突日新橋の
 海舟と志と「次ハ

